

RAKUGO
THE
FUTURE

JAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

ラクゴ・ザ・フューチャー

第三十一回

さらば20世紀特別企画・小ネタ集

文：田中啓文

・しりとり

「ひまやなあ」

「ひまやなあ」

「退屈やなあ」

「退屈やなあ」

「何かしようか」

「何かしようか」

「おまえなあ、ちよつとは自分の頭で考えてしゃべったらどないや」

「何言うてんねん。俺が『ひまやなあ』言おうと思ったら、おまえが先まわりして『ひまやなあ』言っんやないか。おまえこそ、俺の考えを盗むな」

「わしはサトリの化け物か。とにかくひまやなあ。何にもすることないなあ」

「そやなあ」

「しりとりでもしようか」

「しりとり？ そらおもしろい。やろやろ、ぜひともやろ。なんとしてでもやろ」

「いや、そんなおもしろいもんやないと思っけどな。まあええわ。ほな、わしからいくで。」

「トマトか……と……トマト」

「トマトか……と……トマト」

「トマト」

「こないだ孫の良男が死んでな……」

「ままままさか、これ、おばあさんの孫の肉とちゃうか」

「今頃わかつたんかいな。そや、これは良男をよう煮込んだんや」

「しかし、なんでこんなにおいしいんや」

「わからんか。食べておいしい死んだ孫」

・ふしだら

「うちの家では、家族みんなでセックスするのよ」

「な、なんというふしだらな」

「そう。不謹慎相姦」

・宴会料理

「宴会料理というと、長崎のしっぽく料理か、高知の皿鉢料理が有名やな」

「豪華な料理やそうやな。うらやましいな」

「ところが、高知のある皿鉢料理を仕出している食品メーカーは、不況で社員の給与が支払えなくなって、しかたなく皿鉢料理を給与代わりに現物支給してるそうや」

「そんなあほな」

「昔から言うつやないか。皿鉢給与、て」

（注・ほんとは皿鉢（さわち）料理と読みます）

・強姦魔

「オーストラリアに、謎の強姦魔集団が出没して、男も女も見境なく犯しまくるので、えらいことになってるらしいで」
「獣欲、豪を制す、やな」

・続・強姦魔

「／＼／＼」
「なんや、それ」

「5カンマ」

・続々・強姦魔

「わっ、強姦魔や」

「あそこにも強姦魔」

「あつちにもこつちにも強姦魔」

「強姦魔がぞくぞくと」

・続々々強姦魔

「わー、えらい豪華な馬やな」

・親の顔

「ほんまに、どこの子や！塀に落書きするわベルは鳴らすわ
食べたお菓子のごみを門の前にちらかすわ、いっぺん親の顔
が見たいわ」

「ただいまー」

「あ、おまえかいな。遅かったな。また、近所でわるさして
きたんとちゃっやろな」

「ガブッ！」

「ぎゃああああ、何すんねん、人の顔を噛むやなんて」

「近所のおばちゃん言うつつたんや、いっぺん親の顔噛み
たいて」

・美人

「おまえとこのお姉ちゃん、美人やな」
「そや。近所のおばはんも言つとったわ。あんまり美人やから、みんな、そのことを手帳に書いてるらしいで」
「忘れへんようにか？」
「わからんけど、メモされるような美人やねんて」

・一休さん

「一休さん、この橋、わたったらあかんねんて」
「どうしてだい」
「ほら、この立て札に『危険。このはしわたるな』と書いてあるがな」
「だいじょうぶだいじょうぶ。気にしない気にしない。真ん中を通ったらいいんだよ」
ドブーン。

・続・一休さん

「一休とやら。このついたての中の虎を縛れるかのう」
「見事縛ってごらんにいれます」
「なんと。ならばさっそくやってみせい」
「ただし、このままでは無理ですので、どなたか御家来衆に虎をついたてから追い出すように言ってください」
「あいわかった。虎をついたてから追い出せ」
「うわー、ほんまに出てきよった」
ガブツ。

・続々々・一休さん

「一休さん、あそこに悪者が」

「なんだって、よし。この一休に任せろ。ゆくぞ、悪人ども。正義の必殺技を受けてみよ。あー、あー、南無サンダー！」

「ぎゃあああああああ」

「ふふふふ。正義は勝つ」

・遠山の金さん銀さん

「この金さんの桜吹雪、忘れたとは言わさねえぞ」

「百歳過ぎると、物忘れがひどくなって……何でしたかいな」

・文化圏

「よく関西とひとまとめにされるけど、大阪と兵庫は明らかに文化圏がちがうで」

「そろそつや。大阪はべたべたやし、神戸は東京風や。言葉遣いもぜんぜんちがうわな」

「その線引きがどこにあるかを調べたいんやけど、たぶん伊丹のあたりやないかと思うねん」

「なるほど、ちよつと中間やからな」

「いや、昔から言つやろ。伊丹分け、て」

「ぎゃふん」

・金魚のウン」

「ぎょふん」

・ラブホテルにて

「さあ、しよか」

「ちよ、ちよっと、あんた何考えてるの。草刈り鎌やら鋤やら
鍬やら持って……あんた、変態？」

「農耕な愛撫をしたらと思って」

・冬の肴

「寒なってきたなあ」

「すっかり冬やなあ」

「冬は、酒の肴がうまい季節やなあ」

「そうか？」

「考えてもみい。大根、根ぶか、白菜……野菜もつまなるし、
魚でも、河豚がうまいやないか。あと、ブリもつまなるで。
寒ブリちゅうてな。刺身、ステーキ、塩焼き、照り焼き、あ
ら炊き、鍋、ブリ大根……冬のブリは味覚の王者やな」

「しゃあけど、ブリがほんまにうまいのは、冬やのうて秋ち
ゆう説もあるで」

「そんなあほな。ブリは冬やろ」

「でも、昔からよう言うやろ。寒ブリ秋、て」

さらば20世紀。21世紀にまたこのページで会いましょう。

(了)